

奈良女子大学では高度な研究を進めるとともに、女性が社会に参加できるよう学生と産業界を結びつける取組みに力を入れています。

複雑化する社会で積極的に活躍できる人材育成を図り、女性の高等教育の拠点となることを目指しています。

国立大学法人奈良女子大学 学長

今岡 春樹 氏



平成 28 年 10 月 14 日、同大学にて

▶ 創立 100 年を越える国立の女子大学

— 奈良女子大学の特徴や魅力について教えてください。

本学は、お茶の水女子大学と二つしかない国立の女子大学で、創立 100 年を超える古い伝統があります。

そのため全国から学生が集まります。全国から来て全国へ帰っていくというスタイルですね。

1 学年は 500 人ぐらいで、割合で言うと関西出身の学生は 5 割です。そのうち奈良県出身は 40 人位です。大体北海道から沖縄まで最低一人は来ているので、来ていない県がないという感じですね。まずは全国区の国立の女子大学であるということが大きな特徴です。

もう一つの特徴は附属があるということです。附属は幼稚園から高校まであり、中学と高校は「中等教育学校」と言って中高一貫教育を推進し

ています。これも大きな特徴ですね。いわゆる教育系の大学では、高校までであるところは少なく、附属の小学校、中学校までが多い。

でも奈良女子大学の附属は高校までである。さらに大学、大学院があって修士課程、博士課程まで、年齢でいうと 3 歳から 27 歳まで 25 年間の教育システムを持っています。高校までは男女共学ですが、大学と大学院は女性だけなので日本の女性の教育課程が全てそろっている大学です。

— 開校は 1908 年の奈良女高師が前身ですね。

戦前までは「女高師」といって女子高等師範学校でした。それは各県から来てもらって各県に帰るというのが条件だったのです。当時は今言う県知事の推薦がないとダメで、県知事の推薦を受けた人の中からさらに選抜していたのです。そして卒業したら地元へ帰っていく。帰った後は地元の高等女学校の先生になるのです。

高等女学校は、今は、普通高校になっているところが多いと思いますが、戦前は高等女学校を卒業することが相当なステータスだったのです。時代と共に私も行きたいと手を上げる女性が増えてきたので、当然各地で先生が必要になります。その先生を養成することが、女高師の役割だったのです。

師範学校というのは現在の小学校、中学校の先生を養成することがメインだったのです。そして高校の先生を養成するところが、いわゆる高等師範と呼ばれていました。今は筑波大学に名前が変わった東京教育大学と広島大学の両大学が、高校の先生を養成することを使命としていました。そしてその女性バージョンがお茶の水女子大学と奈良女子大学だったのです。

— 当時から女性のリーダーを育成していらっ
しゃったということですね。

そうですね。開校は日露戦争などの影響で東京にすでに出来ていた女子高等師範学校から18年ほど遅れていると思います。勉強をしたいと希望する女性が増えてきたので、関西にも一つ女高師を作ろうとなり、こちらを奈良女高師、東京を東京女高師と呼んだのです。



重要文化財に指定されている正門と記念館

— 本当に伝統ある全国区の女子大学ですね。

そうなのです。田舎にあるように見えて、奈良女子大学は全国区なのです。

奈良女子高等師範学校は1908年に設立されたのですが、奈良への設置にはドラマがありました。

1907年の帝国議会で関西のどこに第二女子高等師範学校を置くかの議案について投票があり、奈良と京都で132対131の僅差で奈良に決まりました。

— 1票差というのはすごいですね。

東京女高師は都会で首都に置かれたのですが、奈良女高師は古都に置かれたのです。とても運命的な使命を感じます。もちろん京都は大きな街ですが京都の前に都があった奈良に置いたということは、それなりの意味があったのだらうと思っています。

▶ 全国でも珍しい県に二つの国立大学

— 奈良県には新制大学として教育大学と二つの国立大学がありますね。

実はそこにもドラマがあるのです。1949年に奈良女子大学ができたことがドラマなのです。

第二次世界大戦後、「学校」を「大学」に昇格させるべく、先人たちが命を削るような運動を展開したのです。というのも当時の大学設置の基本として大都市を除いて「1県1大学」という大原則がありました。

女子大学ではなく、一つの県に一つの国立大学をつくるというのが大前提だったのです。最終的に例外として認めてもらうのですが、採択に至るまでの困難さは想像を絶するものがあったようです。

奈良女子大学には奈良女高師の時代から佐保会というOG会があるのですが、当時その方々が「奈良女高師は、国立の女子大学にするべきだ」と言ってGHQに談判したようです。そこで1県1大学という枠を例外的に外し、二つの国立大学ができたのです。

— OG会の方々はすごく気骨があるのですね。

そうです。当時の佐保会である元女高師の方々は、各県代表ですからね。県で1番か2番の女性が来ているわけです。それは迫力があったと思いますよ。「奈良の女高師は、東京女高師と日本の女性リーダーを育ててきたのだ。それを1県1大学になるので奈良に国立の女子大学をつくらない

ということは日本のためにならない」と。「東京と奈良の東西に一つずつあるというのは意味があるのだ」と主張し、相手がアメリカであろうと何であろうとすごい迫力だったようです。そんな変遷を経て今の奈良女子大学があるのです。

— 並々ならぬパワーを感じますね。

それからもう一つの特徴が附属です。先ほども言いましたが中等教育学校という形で中学校と高校が一緒になっているのです。当時は、優秀な生徒は男子も国立の附属を目指したので、卒業生の中には社会で活躍中の方も多いですよ。

▶ 生徒の自立を育む「奈良の学習法」

— 附属小学校の「奈良の学習法」について教えてください。

附属小学校の学習法は全国的にすごく有名です。一度見学に行かれるといいですよ。私も学長になって初めて附属小学校の授業風景を見に行っただけですが、独特の授業ですね。全部授業を生徒にやらせる。先生が黒子になって裏でコントロールしながら、授業の進行を生徒に任せるのです。

— 小学生の生徒が授業を進めるのですか。

そうです。今、世の中でアクティブラーニングとか言いますが、実は「奈良の学習法」と呼ばれる先例があるのです。5年生や6年生のクラスで1年かけて一つのテーマを、例えば環境問題について皆で一つずつ課題をこなしていくのです。

答えは別にあるわけじゃないのですが、生徒達がいろいろ勉強して「あなたの考えは分かったけど、私はこう思う」等、生徒同士で議論しながら彼ら彼女らなりのゴールにたどり着くのです。

そして最後に授業の研究成果を聞くと、もう涙ものです。君たちに政治を任せたいっていうぐらい素晴らしいものを仕上げてくれます。

— 1年間かけて仕上げるのはすごいですね。

この授業に慣れさせるために1年生から朝の授業でみんな一言ずつ発表する機会を作っています。「昨日こういうことがありました」「何、それは面

白いですね」と言って。お互い言い合うことを強制的に進めると、それが自然に身に付いてくるのです。

とてもいい教育をしているのですが、その子たちが中学校へ行き、やがて大学受験の時期になるとそんなことばかりやられていけないので、だんだん悪い方向にいつてしまうのです。でも賢い子は、受験勉強は仕方がないと割り切っていますね。日本にいる限り受験は通過点だから、ちょっと寄り道して受験勉強をやるのかと考えます。

— 受験は寄り道だと割り切れる子を育てられるというのは、すごいですね。

すごいです。話によると大正時代に有名な木下竹次先生が創造されたそうです。でも先生方がそのスキルを身に付けるのは大変なことなのです。見学に来られた方々は「こんな授業はうちではできない」とよく言われます。

附属小学校では先生方がこうなったらこうやるだろうというのを頭の中でストーリー立てて、裏で動いているのです。正に熟練の技が必要なのです。特に退官される60歳直前ぐらいになると、いわゆる名人芸になります。落語の名人と同じような感じで、生徒の発言がテーマからずれそうになると上手に生徒を動かして修正するのです。その子にどう思うとか尋ねて、真ん中に戻していくのです。本当に名人芸だと思いますよ。

でも名人芸を会得するためには先生方もその子



ども達と一緒に成長するのだという気概を持たないと名人芸にはなりません。非常にレベルが高いので、これをマスターするのは大変ですよ。

— そうですね。大学を卒業したからすぐできるものじゃないですね。

だから独特の授業の中で育つ生徒も先生も自慢なのです。我々はすごい財産を持っていると感じています。

▶ 数少ない「リケジョ」を輩出する大学

— 日本の女子大学で理学部があるのは少ないのですか。

はい。日本の女子大学で理学部があるのは三つだけです。お茶の水女子大学と日本女子大学と奈良女子大学の三大学です。「リケジョ」が少ないのはそのためです。だから理学部を持っているというのは、女子大の中では大きな強みです。

それから女子大学の特徴ですが、本学では生活環境学部と言っているのですが家政系ですね。家政系は総合大学にはなくて、女子大学ならではの学部です。この学部でも理工系の教育をしています。

今、世界ではダイバーシティという考え方が注目されています。職場が国際性や男女について多様であると元気が出て活性化するという考えです。ものづくりをする会社でも女性の採用が増えてきています。本学は実績が自慢です。

▶ 3次元CADのパイオニアから教授へ

— 今岡学長は東京工業大学のご出身ですが、奈良女子大学の教授になられたきっかけについて教えていただけますか。

私は学生時代、制御工学という分野が専門でした。制御工学といっても半分は情報系で、コンピューターを使ってデータ処理をやっていました。

卒業時、当時の通産省の繊維関係の研究所である繊維高分子材料研究所（現、産業技術総合研究所）が情報系の人間を募集していました。一見畑

違いに見えますが、その研究所はCADの中でも一番難しい3次元CADを使ったシステム作り挑戦しようと考えていたのです。私を含め3人がそのミッションに参加しました。

— 海外で開発されていなかったのですか。

当時、世界ではどこもやっていませんでした。どこもやっていないのなら面白いと挑戦する気になったのです。ただ繊維に関しては門外漢なので、先輩に布について教えてもらいながら1から勉強しました。目的はコンピューターによる衣服デザインの試作プログラムを作ることです。型紙があってそのとおりに縫うと人間が着たらどんな形になるのかということコンピューターで予測するのです。それまで試作のプロセスに結構時間がかかっていたので、コンピューターで瞬時にできるようなプログラム開発に取り組んだのです。半年程度で完成させました。



3次元CADを使ったデザインの試作品

— それは業界にとって世界初のシステム開発ですね。世界からオファーがあったのではありませんか。

はい、自分で言うのも何ですが、すごい数のオファーがありました。それは自慢していいと思います。アメリカからもずいぶん見学に来られましたよ。またその成果を学会でも発表しました。学会には被服系の先生が多数、来られていました。その中に本学の先生も参加されていて私達の仕事を聞かれ、奈良女子大学に来ないかとお誘いがあったのです。最初は迷いましたが、迷って五

分五分の時は動くという性分なので、お世話になりますと本学で被服の教育研究を始めました。

▶地方創生推進事業の「COC+」に取り組む

— 学長が今、力を入れて取り組んでいらっしゃることは何でしょうか。

「COC+」という事業に取り組んでいます。これは、文部科学省が掲げる「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」のことです。

この事業は、現在問題となっている若年層の東京一極集中の解消を図るために、各大学が地方公共団体や企業、民間団体等と協働して、学生にとって魅力ある就職先を創出することを目的としています。そしてその人材を養成するためにカリキュラムの改革を行う大学に対し国が支援してくれる制度です。

「COC」事業と「COC+」事業の違いは、例えばCOCは、商店街に元気が無くなってきたら、どうやって活性化すればいいかというノウハウを持っている先生が学生と一緒に商店街に行って、改善策に取り組めます。これなら先生もやりがいがあるのです。

だけどプラスが付くとこれは就職の話になるのです。例えば学生の就職率を1割アップさせることが目標になるので、これは大変ですよ。

奈良県の女性就業率は全国最下位ですし、また本学の学生は全国から来て全国へ帰るというスタイルですから。しかし決まった以上は、目標達成に向けて県内企業に集まってもらい大学のPRをし、学生を企業のインターンシップに出すなど、そんな活動にも力を入れています。

その他大学側としては、履修科目にある「奈良学」に力を入れて、奈良をもっと好きになってもらえるような授業を増やしています。

そうすると学生達は、奈良の魅力ってこうなのだと再認識する。私も学生達に「奈良で4年間を過ごすのだから奈良の観光案内ができるくらいになりなさい」と言っています。ここのお寺はこん

な由緒があって、こういう素晴らしい人がこのお寺を建てたとか、この神社にはこういう由来があって、日本の原点がここにあるといったことが説明できるよう、かつそれを英語で説明できるようになりなさいと。

あとは県内企業の説明会を受けたり、既に就職している先輩たちの話を聞いたりして学生達が奈良を強く意識するような活動を進めています。



▶仏の表情に当時の人の心が表れる

— 奈良県の観光振興のあり方についてのお考えをお聞かせください。

観光はたくさんの方がやってくるよりは、適正な数の人達が歩いているのがいいですね。今はインバウンドですごい人ですけど、これも一時的なものだと思っています。それよりはコンスタントにいろんな国から適正な数の観光客に来てもらう方がいい。1300年の歴史と言いますが、歴史が古いということは立派だということですからね。

それと観光案内で期待したいのは、例えば東大寺はいつできて、広さがこうという説明だけではなく、プラスアルファですよ。作ったことで人の心はどう変わったのか、それに対して一つの解釈をつけるとかですね。そうすると海外から来た人もなるほどそういう背景があったのかと。建物の写真を撮って終わりじゃなく、建物ができた時代背景が必ずあるので、それらを説明すれば喜ばれると思います。

奈良は日本の中心でしたから最高級のものがあ

るところです。日本一の仏像にはこんな意味が隠されているのだと説明できれば素晴らしいですよ。ね。イギリスから来た友人に仏像を紹介した時、これはマインドだと言っていました。ミロのビーナスはその美しい人をさらに美しく見せているけれど、日本の仏像は心のきれいさを顔に表していると。欧米の人はマインドがとても大切だということを理解しているのです。

そんな発見ができるのは奈良において他にはないと思います。それをきっちり残してほしいし、それができるのは心の古里である奈良の魅力だと思います。



▶ 迷ったら積極的に正面突破する

— 女子大生と若い女性の方にメッセージをお願いします。

やっぱり本物とは何かをまず考えてほしい。本物というのは深いところにあるものです。例えばみんなが幸せになるということが目標だとします。実はそこに高いハードルもあるし原理的に不可能だということもあるわけです。「みんなが平等に幸せになるという答えが実は無い」という世界だということが深いところなのです。それを承知した上で努力を続けるしかないのです。

本物があって、そのことを理解していることが大切だと思います。そこを理解していれば多分ブレない。いろいろなことが起こっても、何とか切り抜けられると思います。人生、苦しい時が必ず

あります。それをどう乗り切るかというのが勝負です。本物を一生懸命に追いかけた人は、何かが助けてくれる。一方、偽物を追いかけているとそうはいかない。本物だけが助けてくれるのです。

このことは成功した人がみんな言っています。例えば世の中のために頑張っているという実感があれば、苦しい時に粘りがきくのです。自分のためというのは一見良さそうなのですが、本当に苦しくなった時に直ぐにギブアップして粘りがきかない。こんなところで負けちゃいけない、自分がやっていることは大切なことだからと思っていると粘りがきくのです。勝負には粘り勝ちというのが結構あるのです。不利になって負けそうな時は必ずある。でも負けてはいけない時には、正攻法でとことん頑張る。難しい問題に当たったら正面突破です。

難しければ難しいほど正面突破する方が、成功する確率が高いですよ。相撲では引き技は評価が低いのですが、同じことを言っていると思います。またその方が結果をいつまでも後悔しない。結果がどうあれ自分の人生、正々堂々としている方がすがすがしいです。

— 「むむみょうやくむむみょうじん無無明亦無無明尽」を座右の銘にされていますね。

そうです。これは般若心経ですが、実は無明というのが私の好きな数学者である岡潔さんの本を読んでいるとよく出てくるのです。

無明というのは要するに暗闇の道に迷い込んでいる状態です。明るくないのです。岡さんの考え



同大学の名誉教授であった岡潔氏の主な著書

方では、どちらかというと自己中心的な考え方を無明と呼んでいます。これがはびこると犠牲的行為をたやすくできる人が少なくなり、世の中が暗くなって壊れてしまうと。だから無明というのを無くすことが大切だと書かれています。

岡さんの本を読むと、日本が間違っただけに進もうとしているのではないかと思いますね。

— モットーは「迷ったら積極策」だそうですか、悩んでいる時は前へということですか？

誰が見ても9対1だったら悩みませんが、大体五分五分の時は、悩みます。そんな時は動かないより動くほうを選ぶようにしています。その方が悔いは少ないです。私は鈍感力が強いので、あまり後悔するタイプではありませんが、動いたほうが外から見ていても躍動感があります。

— ストレス発散のためにされていることは？

自転車で山道を走ることが好きです。休みの時は、山道を走ったり、川伝いに走ったりして抜け道を見つけるのが面白いですよ。

体を動かすのが好きなので、朝は最寄り駅の1つ前で降りて、20分～30分歩いて大学に来ます。

その間に今日は何をやるかを大体まとめて到着するので、学長室に入った時は、頭の中がシャキッとしてエンジン全開です。朝から多くの書類が回ってきますが、ややこしい急ぎの書類が混ざっていても頭がスッキリしているので切れ味鋭く決裁印を押しています。



●プロフィール 今岡 春樹 氏

■主な経歴

1952年、島根県出雲市生まれ。1981年、東京工業大学大学院 総合理工学研究科システム科学専攻修士課程修了、同年4月、通商産業省工業技術院繊維高分子材料研究所に通商産業技官として入所。1990年、文部教官 奈良女子大学助教授家政学部に転任、2001年、同教授生活環境学部に昇任、2007年、国立大学法人奈良女子大学教育研究評議員に併任、2011年、同大生活環境学部長に併任、2013年、同大学長に就任、現在に至る。

■座右の銘、好きな言葉

「む むみょうやく む むみょうじん
無無明亦無無明尽」

■大事にしていること

優れた人との出会い

■趣味

映画・囲碁・将棋の鑑賞

■私のモットー

迷ったら積極策

■好きな食べ物

夏はそうめん、冬はすき焼き

■お勧めの本

「春宵十話」岡 潔著

■私のストレス発散法

自転車で山道を走る

■奈良県内で一番好きな場所

石上神宮、西大寺

■所属組織の概要

- ・ 名 称：国立大学法人 奈良女子大学
- ・ 所在地：奈良県奈良市北魚屋東町
- ・ 創 立：1908年前身の奈良女子高等師範学校を設置
- ・ 役職員数：365名
- ・ 園児・生徒：737名
- ・ 学 部 生：2,069名
- ・ 大学院生：525名

(聞き手・文責：橋本公秀)